離島に住む成人聾者が自発した身振りの形態論的分析

武 居 渡*・鳥 越 隆 士**・四 日 市 章***

本研究では、離島に住む就学経験のない聾者が自発的に発展させた身振りについて記述し、その特徴を検討した。調査者と対象の聾者との自由会話をビデオに収録し、すべての身振りを単語を単位として書き起こした。その結果、全体の約3割が指さしによって構成されており、指さしが聾者の身振りの中で重要な機能を担っていた。具体物に対する指さしだけでなく、その場にはないものまで指さしを使って表し、指さしが語彙として定着した例も見られた。また、指さし以外の身振りでは、現実世界のものの扱い方や対象物をパントマイム的に再現しているわけではなく、手型自体があるカテゴリーを持ち、聾者は現実世界にあわせて手型を選択的に使用していた。このような特徴は、日本手話やアメリカ手話などの体系的な手話言語にも見られ、体系的な手話言語が、身振りの特徴を基にして発展していることが示唆された。

キー・ワード：未就学聾者、身振り、手話言語、形態論的分析、指さし

I. はじめに

人間は成長の過程において、言語を獲得し、それをコミュニケーション手段として使用するようになる。聾児の場合、養育者が聾者で、手話言語の使用者であれば、養育者の手話による言語的働きかけを受け、日本手話やアメリカ手話のような体系的な手話言語を自然に獲得する。しかし、ろうの両親を持つ聾児は、およそ聾児の10%にすぎないため(Padden and Humphries, 1988¹⁾)、乳幼児期から手話言語環境にある聾児は、ごくわずかであるといえよう。多くの聾児は、聴者の両親のもとに生まれるため、乳幼児期に手話言語に接する機会はほとんどない。しかしながら、聾学校などで専門的な教育を受けず、体系的な手話言語に接することのなかった重度の聴覚障害を有する聾児においても、手指によるコミュニケーション手段を作り出すことが報告されている(Goldin-Meadow and Morford, 1985²⁾)。

Goldin-Meadow and Morford (1985³⁾) は、補聴器を装用しても、特別な配慮なしでは音声言語を獲得することが困難な聾児の身振りを分析した。この聾児の

家族には、手話言語を使用できる者はいなかったが、この聾児の表出した身振りは、手話言語の入力情報がかなり制限されていたにも関わらず、かなり複雑な構造を有していた。それらの身振りの複雑性は、語彙論的、統語論的、形態論的な面で見られ、手話言語の特徴と類似していた。このように、聴覚障害によって音声言語の受容に何らかの制限が加えられると、手話言語の入力がなくとも、聾児は手指モダリティを使用する身振りを独自に作り出すという。

聴者であっても、音声による受容や表出が何らかの理由で遮断されたとき、手指が音声に代わって用いられることが知られている。例えば、工場の騒音下で働く聴者間のコミュニケーション(Meissner and Philpott, 1975⁴⁾)、スピーチタブーという文化的習慣を持つアボリジニ(Kendon, 1988⁵⁾)などでは、身振りなどを含む手指コミュニケーションが使用されている。これらの例からもわかるように、音声の受容や表出が遮断されると、生活でのコミュニケーションの必要性から、ある程度の言語的な体系を備えた手指を用いたコミュニケーション手段を発展させることが推測される。

また、体系的な手話言語に接することがなくとも、多くの聾者が集まることによって、独自の手話言語を形成し、使用するようになるという特異的な例が報告

*筑波大学大学院

**兵庫教育大学

***筑波大学心身障害学系

されている (Groce, 1985⁵⁾; Washabough, Woodward and Desantis, 1978¹⁵⁾。

Groce (1985⁵⁾) は、島の人口に対して先天性の聾者の占める割合が非常に高いアメリカ合衆国のマーサ・ヴィンヤード島について調査している。そこでは約3世紀にわたって、独自の手話が発達し、その手話は聾者だけでなく聴者も使用していたという。また、Washabough, Woodward and Desantis (1978¹⁵⁾) は、カリブ海に浮かぶプロヴィデンス島でも、独自の手話言語が発達していたことを報告している。これら2つの島に共通して言えることは、地理的にも文化的にも都市部から離れており、そこに複数の聾者がいたということである。都市部で使用されているアメリカ手話のような体系化された手話言語に接することがなくとも、複数の聾者がいることで、手話言語が発達し、複雑化するといえよう。

これらの研究から、聾児が手話言語環境の中で獲得したり、聴者が必要に迫られて用いたりするコミュニケーション手段は、身振りから複雑な構造を持つ手話言語に至る様々なレベルで形成されることが示唆されている。日本においても、聾者が日本語を十分に身につけることなく地域社会に適応し、生活している離島がある (鳥越, 1994¹²⁾; Torigoe, Takei and Kimura, 1995¹⁴⁾)。この離島に住む就学経験のない聾者がコミュニケーション手段として使用している身振りは、日本語や体系的な手話言語の影響をあまり受けることなく、独自の構造を有していると推察される。このような身振りは、体系的な手話言語の基本となる手指や表情によるコミュニケーションの基本的な要因を有していると考えられ、身振りの分析によって、手話言語の構造の一端を明らかにすることができる。

本研究では、離島に住む就学経験のない聾者の身振りについて分析を行い、主として形態論的な特徴を明らかにする (目的1) とともに、日本手話やアメリカ手話などの体系的な手話言語との関連について明らかにする (目的2)。

II. 方 法

1. 対 象

離島に住む67歳と70歳の先天性の聾者の姉妹A、B (以下聾者A、聾者Bと略記する) を調査対象とする。最近まで、母親と聾者A、聾者Bの3人で生活していたが、母親が亡くなったため、現在彼女らは、隣り合う2軒の家にそれぞれ住んでいる。両親、親戚などの中には、彼女ら以外に聾者はなく、手話言語を

使用するものもいなかった。この2名の聾者の主たるコミュニケーション手段は身振りであり、同じ身振り体系を共有し、互いの身振りを理解しあえている状況がうかがえた。

また、聾者A、Bの家族や近所に住む聴者とも身振りで会話をしていた。特に、近所の商店の女性は、かなりスムーズに2人の聾者とコミュニケーションをすることが可能であった。聾者A、Bは、読むことのできない手紙などをこの商店にもっていき、読んでもらうという。商店の女性は、彼女が幼い頃から聾者A、Bを知っており、近所に住んでいることから聾者A、Bと頻繁に会うので、彼女らの使用する身振りが自然に理解できるようになったという。彼女らは、自分の家の敷地内に小さな畑を作り、自分たちが食べる野菜などを作る一方、海へ行って貝やカニ、エビなどを採って、生計を立てていた。

彼女らは、就学経験がなく、そのため日本手話や日本語の教育を受ける機会を得ることがなかった。インタビューの状況から、彼女らの身振りは日本手話からの影響はなく、日本語からの影響も少ないと考えられた。

2. 調査方法

調査者は、約1カ月半にわたって、対象聾者のいる離島に滞在した。その間、十数回にわたってA、B両者の自宅を訪問し、対面のインタビュー調査を行った。聾者Bの自宅は、聾者Aの自宅の隣にあるため、インタビューを行う際には、聾者Aに聾者Bの自宅に来てもらい、A、B両者に対して同時に行った。彼女らは文字言語を含む音声言語や日本手話を習得していなかった。そのため、調査者の質問が伝わらず、必要な情報を十分に得ることができない場合は、近所に住む聴者や、定期的に彼女らの自宅を訪問しているヘルパーにもインタビューをし、彼女らに関する情報を収集した。さらに、2人が表出した身振りのうち、調査者が理解できなかった身振りについて近所の聴者に尋ね、情報を得ることもあった。彼女らに対する十数回のインタビューの後、調査者は彼女らの表す身振りの意味をおおよそ理解できるようになっていた。

調査者と聾者との会話は、身振りによるものであったため、文字による記録が難しく、本人の許可を得てビデオに収録した。なお、調査者は、日本手話及び日本語対应手話の読みとり及び表出の技能を持つ聴者である。

3. 分析方法

聾者Aや聾者Bに対する数回のインタビューの後

離島に住む成人聾者が自発した身振りの形態論的分析

に行われた彼女らと調査者の計3名の自由会話約30分のビデオ記録を分析対象とした。会話の中で、彼女らの自由な発話に対して調査者があいづちを打ったり、質問をしたりした。収録された会話の中では、主として聾者Bが身振りで話をし、それに対し聾者Aはごくたまにコメントをはさむ程度の参加状況であったこと、また、収録に先立つ数回のインタビューによって、彼女らが同じ身振りを共有していることがわかっていたこと等から、ここでは聾者Aと聾者Bの身振りを区別せずに分析を行った。

まず、彼女らが表出した身振りを、単語を単位として書き起こした。その際、1動作1単語として記述を行い、後の分析を容易にするために、それぞれの身振りを日本語の単語に置き換えた。身振りによって表されたこれらの意味の単位を、ここでは身振り単語と呼ぶ。

彼女らの身振りを書き起こした後、分析対象となった身振り単語を、「指さし」と「指さし以外の身振り」に分類し、以下の観点から分析を行った。

1) 指さしの分析方法: Goldin-Meadow and Mylander (1990⁴⁾) の指さしの分類を参考に、指さしを、①「具体物への指さし」、②「その場にはないものへの指さし」、③「語彙化した指さし」の3種類に分類した。「具体物への指さし」とは、表現したいものや人を直接指さすことによって、それらのものを表す指さしである。「その場にはないものへの指さし」とは、表現したいものが壁などの視覚的遮断物によって見えなくなっている場合や時間の経過によってかつてあったものが現在ない場合などに使用される指さしで、指さしの延長線上に表現したいものが現実にはない場合の指さしである。「語彙化した指さし」とは、指さし自体が語彙となってしまったものをいうものとする。また、どれにも分類できないものは「その他」に分類した。

2) 指さし以外の身振りの分析: 1つの身振り単語は、「手型」、「運動」、「位置」の3つの要素の組み合わせから構成されている。これらの要素のうち、「手型」は情報の担い手として、特に重要であると考えられる。本研究では、手型を中心に身振りの分析を行い、特に手型とそれの表す意味との関係から、それらを3種類の形態素に分類し、さらに各形態素について、そこで用いられている手型を分類表記した。手型の形態素分類については、Mylander and Goldin-Meadow (1991⁵⁾) を参考に、手型を①「取り扱い形態素」、②「物体形態素」、③「意味形態素」の3つに分類した。「取り扱い形態素」とは、手型が物体を取り扱う際の手の形を表しているものであり、「物体形態素」とは、

Table 1 聾者A, Bに見られた身振り単語の分類と出現数

指さし	指さし以外の身振り	分析不可語	計
309 (30%)	673 (65%)	57 (5%)	1039 (100%)

Table 2 指さしの分類と出現数

具体物への指さし	198 (64%)
その場にはないものへの指さし	54 (17%)
語彙化した指さし	33 (11%)
その他	24 (8%)
計	309 (100%)

手の形が物体そのものを表しているものをいう。「意味形態素」とは、「取り扱い形態素」や「物体形態素」のどちらにも属さず、さらに抽象的、恣意的なものを表しているものとする。また、これら3つのカテゴリーのどれにも分類できないものは、「その他」に分類した。

各形態素での手型の表記に関しては、米川(1984¹⁷⁾)の手型の表記法を参考にしながら行った。その際、片手身振りは1つの手型を持ち、両手身振りは2つの手型を持つとして記述を行った。

なお、指さしの出現数、各手型の出現数などは、自由会話の中での話題によって異なる可能性もある。この点を確認するため、前述と同様な条件設定で、別の日に収録した資料についても身振りの記述と分析を行い、今回のビデオ資料分析の参考資料とした。

III. 結 果

1. 身振り単語の抽出

インタビュー時間30分の間に表出された身振り単語は、1039語あった。表出のスピードは非常に速く、特に聾者Bにおいては顕著であった。Table 1は、指さしと指さし以外の身振りの出現数を示したものである。聾者A、Bの身振りのうち約3割が指さしであった。

また、同一条件の別の資料の分析では、約30分の自由会話の中で1012の身振りが表出された。そのうち、指さしは380あった。これは、総身振り数の38%にあたる。

2. 指さし

指さしに分類された309語のうち、「具体物への指さし」、「その場にはないものへの指さし」、「語彙化した指

さし」の出現数は、Table 2 に示したとおりである。以下、それぞれの指さしについて検討する。

なお、{ } は、身振りによる表出を表し、指さし (Pointing) は、PT と略記する。また、PT の後の数字は人称を表し、PT1 は自分への指さしを意味するものとする。

1) 具体物への指さし：「具体物への指さし」は、指さし全体の半分以上を占めていた。例えば、「暑いから扇風機をつける」という文脈では、

{光 PT1 暑い PT 扇風機 PT1}

と、扇風機や自分を指さすことにより、それぞれ「扇風機」「私」という意味を表していた。聴者の間でも、これに類似した指さしの利用は広くなされているようである。

2) その場にないものへの指さし：また、「その場にないものへの指さし」については、次のような例が見られた。聾者 B の身振りによる表出が、近所の人のうわさ話になったとき、「近所に住む老人が亡くなった」ということを表現するのに、

{死ぬ PT 亡くなった人の家の方向 死ぬ 拝む PT 亡くなった人の家の方向}

と、家の中からは見えないがその家のある方向を指さすことにより、亡くなった老人という意味を表していた^{#1)}。

さらに、「妹が病気になったとき、定期的に訪問していたヘルパーが妹を病院に連れていく」という文脈の中で、「ヘルパーが妹をつれていく」という意味を表現する際に、

{車 連れていく PT 外 PT 妹 連れていく PT 妹}

と、ヘルパーが聾者 A の自宅に来るときヘルパーがいつも車を止めている外を指さすことにより、ヘルパーという意味を表していた。

3) 語彙化した指さし：語彙化している指さしの例では、「市街地の H 市からテレビを直しに来る」という文脈において

{来る 直す 来る PT テレビ PT 左後方 直す}

と左後方を指さすことにより、島の中の市街地 H 市を表していた。この際、指さしの指し示す方向は市街地の方向とは一致しておらず、指さしが身振り体系の中で一つの語彙となっていた。

さらに、「あなた (調査者) は、東京から飛行機で来たのか」と調査者に対して質問する場面では、

{PT2 飛行機 PT 左後方 PT2 PT 左後方 飛行機 PT2}

Table 3 手型のタイプと出現数

取り扱い形態素	204 (23%)
物体形態素	444 (50%)
意味形態素	118 (13%)
その他	126 (14%)
計	892 (100%)

Table 4 「取り扱い形態素」に見られた手型と出現数

手 型	出現数	表しているもの
B	135 (66%)	食するときの手の形；車椅子をこぐときの手の形
A	23 (11%)	松葉杖をついているときの手の形
WC	15 (7%)	入れ歯をはめるとき手の形
O	13 (6%)	聴診器を当てるとき手の形；車のハンドルを握る時の手の形
その他	18 (10%)	
計	204	

と左後方を指さし、さらに目を細め、口を横に広げるような強調の表情を伴って、東京という意味を表していた^{#2)}。これも語彙化した指さしの一つであると考えられる。

以上のように、この聾者の身振り体系の中では、指さしが単に具体物を表すのにとどまらず、指さしで表すことができるものの範囲が、その場にないものにまで広げられていた。

3. 指さし以外の身振り

指さし以外の身振り 673 語中、両手身振りは 232 語、片手身振りは 428 語であった。また、表情や体の動きだけで、手指を伴わないサインも 13 語あった。総手型数は、両手身振りの語数の 2 倍と片手身振りの語数の和 892 語であった。すべての手型を「取り扱い形態素」「物体形態素」「意味形態素」に分類した結果が Table 3 である。「その他」に分類された 126 語をのぞいた 766 の手型を分析手型総数とした。

1) 取り扱い形態素の出現数：「取り扱い形態素」における手型の出現回数とそれぞれの手型が表しているものを表にまとめたものが Table 4 である。

「取り扱い形態素」では、指を広げた「B 手型」が

離島に住む成人聾者が自発した身振りの形態論的分析

Table 5 「物体形態素」に見られた手型と出現数

手 型	出現数	表しているもの
B	285 (64%)	枕；飛行機のはね；炎；墓標
G	41 (9%)	男性器；ひげ；鉛筆；聴診器の耳に当てる部分
A	21 (5%)	髪束の束ねた部分；あごひげ
E	19 (4%)	髪束の束ねた部分；抜けた髪の毛；生えてくる歯
B23	19 (4%)	女性器
その他	59 (13%)	
計	444	

Table 6 「意味形態素」に見られた手型と出現数

手 型	出現数	表しているもの
B	39 (33%)	数字の 5；合わせて
G	29 (25%)	数字の 1；人（自分；妹）
L	24 (20%)	数字の 2
H	9 (8%)	数字の 2
P	8 (7%)	数字の 3
その他	9 (8%)	
計	118	

135 回出現していた。例えば「食べる」という意味を表す際の手の形や車椅子をこぐときの手の形として使用されていた。しかし、「B 手型」自体が特定の意味を持っているというよりは、腕全体あるいは身体全体である動作がなされており、すべての手型のうち、「B 手型」が最も作りやすい自然な形の手型であるため、高頻度を選択され使用されたと思われる例も多数あった。次いで多かったのは、握りこぶしの手型である「A 手型」であった。これは 23 回出現し、松葉杖をついているときの手の形や聴診器を当てるときの手の形として使用されていた。そのほか、Table 4 にあるように、「WC 手型」や「O 手型」も出現し、これらの手型はそれぞれ、入れ歯をはめるときの手の形、車のハンドルを握るときの手の形などで使用されていた。

2) 物体形態素の出現数：「物体形態素」における手型の出現回数とそれぞれの手型が表しているものを表にまとめたものが Table 5 である。「物体形態素」の場合も「B 手型」が 285 回と最も多く出現していた。「B 手型」は、例えば枕や飛行機の翼や火が燃えるときの炎、墓標などを表していた。しかし、「取り扱い形態素」の場合と同様に、「B 手型」自体が特別な意味を持たず、腕や身体全体であるものを表す際に、自然な手型である「B 手型」が用いられた例も多数あった。次いで握った状態から人差し指のみを伸ばした「G 手型」が 41 回出現した。この手型は例えば、男性器、ひげ、鉛筆、聴診器の耳に当てる部分などを表していた。「A 手型」は 21 回出現し、女性の髪の束ねた部分や男

性のあごひげなどを表していた。ほかにも、Table 5 にあるように「E 手型」や中指の先を人差し指の第一関節に接触させる「B23 手型」が出現していた。特に、「B23 手型」は、「女性」という意味以外では使用されず、その手型は女性器を表していると考えられた。

3) 意味形態素の出現数：「意味形態素」における手型の出現回数とそれぞれの手型が表しているものを表にまとめたものが Table 6 である。「意味形態素」に分類された手型の多くは、数字を表していた。その中でも、B 手型が最も多く使用され、その出現数は 39 回を数えた。「B 手型」は、数字の 5 を表すほかに、「男と女をあわせて何人」という文脈における「あわせて」という意味で使用された。次いで、「G 手型」が 29 回出現していた。「G 手型」は、数字の 1 を表すほかに、「自分と妹は別々に食事をする」という文脈で、「別々に」という意味を示すものとして使用されていた。左右の「G 手型」がそれぞれ 2 人の聾者 A、B を表していると考えられる。そのほかにも「L 手型」や「H 手型」が出現しており、ともに数字の 2 を表していた。

4) 各手型の出現数：Table 7 は、身振りを構成していた各手型の出現数を示したものである。分析手型総数 766 のうち、最も多く表出されていたのは、「B 手型」、「G 手型」、「A 手型」であった。また、同一条件の別の資料の分析でも、「B 手型」が最も多く、ついで「G 手型」、「A 手型」が多く見られた。このように、数多く表出されている手型は、その手型を作るのに困難を伴わないものであり、手を広げた「B 手型」、手を

Table 7 身振りを構成する手型と出現数

手 型	出 現 数
B	459 (60%)
G	70 (9%)
A	44 (6%)
L	33 (4%)
C	22 (3%)
その他	138 (18%)
計	766

握った「A 手型」、人差し指だけを伸ばした「G 手型」の 3 つの手型だけで、全体の 4 分の 3 を占めていた。

IV. 考 察

1. A、B が表出した身振りの特徴

言語獲得の過程では、聴児、聾児に関わらず 1 歳前後から、腕を伸ばし、人差し指を対象に向ける運動パターン、すなわち指さしが見れ始める。秦野 (1983²⁾) は、聴児の指さしの機能的分化について、指さしを「興味・驚き・再認」「要求」「叙述 (命名・関連づけ)」「質問・確認」「応答」という 5 つの段階に分類し、整理している。大浜・辰野・斉藤・武井・荻野 (1981⁹⁾) によると、19 カ月までは音声言語と指さしは全体として一つの意図を表すが、その後、指さしと音声言語が別々の意図を表すようになり、両者は機能分担をし、相補的な関係を示すようになるという。

Goldin-Meadow and Morford (1985³⁾) は、聴者の両親を持つ言語獲得前の聾児 10 名、および聴児 3 名とその母親との相互のかかわりをビデオ記録し、その中で表出された身振りや音声言語について分析している。聾児の 1 語文 (1 サイン文) としての指さしは、おもちゃ、食べ物、乗り物、動物、人、体の部分、衣服、場所など、比較的広い範囲の対象を指し示していた。聴児も同様に、指さしは広範囲の対象を表していた。Goldin-Meadow and Mylander (1990⁴⁾) によると、聾児はその後 3 歳 3 カ月で、その場がないものに対する指さしを使用し始めたが、聴児は発達に伴い音声言

語を獲得していくため、その場がないものを表す際には、意味するものと意味されるものが分化した音声言語を用いるようになる。しかし、聾児の場合には、音声言語に見られるような機能を指さしに持たせ、その場がないものを表す際に、任意の記号として指さしを使用するようになると考えられる。

今回分析対象とした聾者もまた、指さしをその場がないものを表すことができるまでに発展させていた。話題が異なっている場合でも、表出した全身振りのうち、指さしが約 3 割から 4 割を占め、彼女らの身振り体系の中で重要な役割を果たしていた。これは、この聾者には日本語や日本手話などの言語環境が十分でなかったため、幼児期に使用していた指さしが他の言語に置き換わることなく、そのまま残っていると考えられる。さらに、指さしが語彙となって定着したものもあり、聾者の身振り体系の中で、独自に指さしを発展させていることがうかがえる。

Battison (1974¹⁾) は、無標手型 (Unmarked Hand-shape) と呼ばれる、最も自然かつ基本的であり、作るのが容易な 7 つの手型を提案している。これらは、聾者の両親を持つ聾児が最初に獲得する手型として挙げられている。

分析対象の聾者 A と聾者 B の表出した身振りを構成する手型で、最も多く出現していたのは、「B 手型」「G 手型」「A 手型」であり、これらはすべて、Battison のいう無標手型に含まれるものである。アメリカ手話言語に限らず、他の多くの手話言語や身振りにおいても、これらの無標手型は数多く使用されているといわれている。

また、手話言語に特有の形態論的特徴として、類辞 (classifier) の存在が挙げられる。類辞とは、ものそのものの代わりをする代名詞のような働きをするほか、ものそのものを連想させる機能を持ち、運動や位置を伴って動詞を形成する形態素である。Wilbur (1987¹⁶⁾) は、類辞を「サス (SASS: Size And Space Specifier)」「ハンドル (Handle)」「意味類辞 (Abstractor Semantic Classifier)」の 3 つに分類している。「サス」とは、手の形がそのものの形状を表すもので、日本手話においては、「電話」「本」などで使用される手型がこれにあたる。「ハンドル」とは、ものを取り扱うときの手の形を真似た手型であり、日本手話において「たばこ」「車」などで使用されている手型がこれにあたる。「意味類辞」とは、手型が抽象的な形状を示すものである。

分析対象の聾者の表出した身振りは高度な言語規則

離島に住む成人聾者が自発した身振りの形態論的分析

の体系を備えているとはいいがたいが、「取り扱い形態素」「物体形態素」「意味形態素」というように、手話言語における類辞と同様の枠組みをあてはめて分析を行うことが可能であった。

2. 身振りと言話言語の関係

さらに注目すべきことは、聾者の表出した身振りが、必ずしも現実世界のものの扱い方や対象物そのものをその都度パントマイム的に再現しているわけではないということである。つまり、手型自体がカテゴリー化されており、そのカテゴリーに含まれる現実世界の対象がその手型で表される。例えば、「車」というサインでは、聾者は「A手型」か「O手型」を使用していたが、これらはハンドルの太さに応じてその中間的な手型が存在するのではなく、車という意味を表現するために、聾者が「A手型」か「O手型」を選択して用いている。このような特徴は、聴者のパントマイムやジェスチャーには見られないものであり、聾者の身振りが構造化されていることが示唆される。

この聾者に対する言語入力、聴者が話し言葉に付随して表すわずかな手の動きや口形、表情などである。また、コミュニケーションを図るために断片的に身振りを使用したかもしれない。しかし、聴者がA、B両者に対して使用する身振りは、体系的な構造をもったものであるとはいいがたい。また、聴者が日本語を表出するときの口形は、A、B両者にとって、体系的な言語としての入力情報をもっているわけではない。日本語や日本手話のような体系的な言語との接触が大幅に制限されているにも関わらず、彼女らが身振りを体系的に使用できるようになったことについては、生得的な要因も考えられる。1960年代から提唱された生成文法理論によると、成人の言語に外界から与えられる言語情報からだけでは帰納できないような部分が存在するということが主張されている(大津, 1989¹⁰⁾)。言語獲得における言語経験は、生得的な情報を活性化する役割を果たし、言語経験の蓄積そのものが成人の文法の総体ではないといわれている。今回分析対象となった聾者の場合にも、外部からの断片的な言語情報の蓄積のみからでは、これほど複雑な身振り体系は作られないであろう。

また、多くの特徴が手話言語と類似していることは、手話言語が身振りの特徴を基にして発展してきたことを示唆している。すなわち、分析対象の聾者が表出したような身振りが、多数の聾者によって共有され、その中でより複雑化、構造化したものが日本手話であるということが考えられる。伝達手段としての手指の動

作を考えた場合、音声言語に伴って表出される自然な手の動きから身振り、さらに、規約性の高い手話言語に至る一つの連続体を想定することができる(鳥越, 1995¹³⁾)。聾者が不十分な言語刺激から身振りの体系を作り出す過程、さらに、身振りがより複雑化、構造化して手話言語へと発展していく過程は、伝達手段の構造がより複雑化、緻密化し、鳥越のいう連続体の一端から他端への移行過程と考えることができる。身振りまでの移行過程は個人内で発生し、その後の手話言語への発展は複数の聾者の相互作用によって生ずるといえよう。

本研究で分析を行った身振りは、手指のみから成り立っているのではない。「シュー」や「アカー」など身振りに必ず音声が付いているケースが観察された。これらの音声は、身振り単語を構成する一要因になっていると考えられる。ある身振りには、特定の音声が必要付随していた。今後、このような音声と、手指による身振りとの関わりなどについて、より詳細な分析を行う必要がある。また、文化人類学的・社会学的な視点も含む幅広い観点からも、身振りについての分析を行う必要があろう。

V. まとめ

本研究より、①聾者A、Bは、その場になく抽象的な事象までも指さしによって表すようになり、指さし身振り体系の中で独自に発展していたこと、②身振りを構成する手型がカテゴリーカルに使用されていたこと、③このような身振りの特徴は手話言語と同様であったこと、が明らかになった。

今後、身振りがどのような体系的な手話言語になっていくのかという観点から、このような身振りをさらに統語論的に分析する必要がある。

注1) 収録終了後、最近近所で老人が亡くなったかどうかを、近所に住む聴者に尋ねた結果、聾者Bが指し示した方向の家の老人が亡くなったという情報を得たため、指さしが「近所に住む老人」という意味であることを確認した。

注2) 強調の指さしを伴った左後方への指さしは、本収録時以外にも多くの場面で、聾者Aや聾者Bの発話の中で観察された。この指さしは、東京だけでなく、島外のすべての場所に対して用いられ、島外の場所一般を指し示すものであると考えられた。

文 献

- 1) Battison, R. (1974) Phonological deletion in American Sign Language. *Sign Language Studies*, 5, 1-19.
- 2) 秦野悦子 (1983) 指さし行動の発達の意義. *教育心理学研究*, 31 (3), 255-264.
- 3) Goldin-Meadow, S. and Morford, M. (1985) Gesture in early child language: Studies of Deaf and Hearing Children. *Merrill-Palmer Quarterly*, 31 (2), 145-176.
- 4) Goldin-Meadow, S. and Mylander, C. (1990) Beyond the input given: The child's role in the acquisition of language. *Language*, 66 (2), 323-355.
- 5) Groce, N. E. (1985) *Everyone Here Spoke Sign Language*. Harvard University Press.
佐野正信訳 (1991) みんなが手話で話した島. 築地書館.
- 6) Kendon, A. (1988) *Sign Languages of Aboriginal Australia*. Cambridge University Press.
- 7) Meissner, M. and Philpott, S. B. (1975) The sign language of sawmill workers in British Columbia. *Sign Language Studies*, 9, 291-308.
- 8) Mylander, C. and Goldin-Meadow, S. (1991) Home sign systems in deaf children: The development of morphology without a conventional language model. In Siple, P. and Fischer, S. D. (Eds.) *Theoretical Issues in Sign Language Research Volume 2: Psychology*. Chicago University Press, 41-63.
- 9) 大浜幾久子・辰野俊子・斉藤こずゑ・武井澄江・荻野美佐子 (1981) 母子相互作用における指さし行動の発達 時間標本資料の分析. *教育心理学研究*, 29 (3), 272-278.
- 10) 大津由紀夫 (1989) 心理言語学. 太田朗(編), *英語学大系 6 英語学の関連分野*. 大修館書店, 181-361.
- 11) Padden, C. and Humphries, T. (1988) *Deaf in America: Voices from a Culture*. Harvard University Press.
- 12) 鳥越隆士 (1994) 離島の聾者の生活史. *国立身体障害者リハビリテーションセンター紀要*, 14, 45-51.
- 13) 鳥越隆士 (1995) 言語の枠組みから“しぐさ”を考える. *日本語学*, 14 (3), 24-31.
- 14) Torigoe, T., Takei, W., and Kimura, H. (1995) Deaf life on isolated Japanese islands. *Sign Language Studies*, 87, 167-174.
- 15) Washabough, W., Woodward, S., and Desantis, S. (1978) Providence Island Sign Language: A context-dependent language. *Anthropological Linguistics*, 20 (3), 95-109.
- 16) Wilbur, R. (1987) *American Sign Language: Linguistic and applied dimensions*. College-Hill Press.
- 17) 米川明彦 (1984) 手話言語の記述的研究. 光生館.
—1997.3.5.受稿, 1997.8.23.受理—

Jap. J. Spec. Educ., 35 (3), 33-41, 1997.

A Morphemic Analysis of the Gestural System Produced Sisters who are Deaf, Living on an Isolated Island

Wataru TAKEI*, Takashi TORIGOE**, and Akira YOKKAICHI*

*University of Tsukuba
(Tsukuba-Shi, 305)*

***Hyogo University of Teacher Education
(Yarhiro-Cho, 673-14)*

A linguistic survey was performed in an attempt to clarify the structure of the gestural system used by two sisters who are deaf and live on an isolated island. The sisters had little input of the Japanese language or Japanese Sign Language, because they both have profound hearing loss and were not educated in a school for children who are deaf. Free conversation between them and the first author was videotaped. Their main method of communication was a gestural system. All the gestures they used were transcribed by using the glosses of Japanese words. The results indicate that one-third of the gestures expressed by the sisters consisted of pointing. They pointed not only to real-world objects in the immediate environment, but also to objects that were not within their visual environment, past events, and abstract objects that they intended to refer to. Further analysis showed that each hand shape had its own category, and the sisters selected a shape from the limited hand shape repertory to express the acts and objects that they intended to refer to. Both features in their gestural system are also found in conventional sign languages, such as Japanese Sign Language or American Sign Language. These findings suggest that a conventional sign language should be developed based on such a gestural system produced by persons who are deaf and have little linguistic input.

Key Words : people who are deaf, gestural system, sign language, morphemic analysis, pointing